

山野草 タネの形・花の形・成長の形 ～早春のキンポウゲ科～

伊東吉夫 (ひとはく連携活動グループ「希少植物研究会」)
(三田山草会、東京山草会、みねはな会)

はじめに

山野草と関わってほぼ15年近くになります。阿蘇のススキ草原に咲いていたリンドウを見たのがきっかけです。最近では身近の自然に咲くリンドウが少なくなりました。ササユリ、カザグルマ、サギソウなど数え上げればきりがありません。園芸採取、自然遷移、森林伐採、道路工事、湿地や草地開発などが原因として上げられます。山野草ファンの一人として、季節がめぐって来ると再び顔をのぞかせる可憐な花々が消えてなくなることはとても残念です。

このような状況下で自分が少しでも役に立てることは何かと考えたときに、タネから育てる経験を生かした増殖方法のセミナー、自然にあるものは自然に残すという啓もう活動が必要と考え、ひとはくセミナーでの実生・挿し木の仕方、自生地の観察会や、展示会での実生増殖コーナーの開設、「関西実生連絡会」での「山野草 タネのまき方・育て方」の書籍発行等を通じての啓もう活動を行ってきました。

これらの活動を通して、可憐な山野草のタネのかたち、花のかたち、成長のかたちを記録し続けています。全国的な山野草のタネの交換会で入手したタネの実生記録、自宅の庭で栽培している山野草の芽出しから開花、結実までの成長の記録を、時間の許す限り写真に収め記録に残しました。四季に咲く山野草・高山植物等は、出来る限り自生地へ訪問し花やタネを写真に収めて記録に残しました。

現在、初春～春に開花する植物19種、夏に開花する植物19種、秋に開花する植物20種、高山植物51種、合計109種を対象としています。

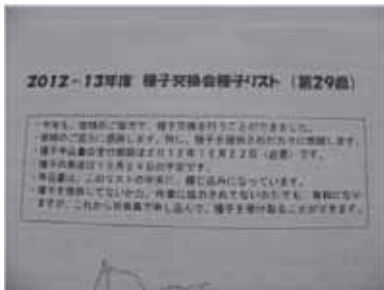


図1. 種子交換会のリスト



図2. 交換で送られて来た種子



図3. 自宅での播種の様子

材料と方法

今回は、データがある程度集まってきた早春に開花するキンポウゲ科の植物について、まとめてみました。セツブンソウ、ニリンソウ、ミスミソウ、フクジュソウ、オキナグサの5種を対象としています。

結果

1) 花の形や色に変異が多い

多くの山野草や高山植物などのタネのかたち、花のかたちを記録する中で、キンポウゲ科の花(顎片)の色や形の変化が非常に多いことに気が付きました。ミスミソウはよく知られていることですが、セツブンソウとニリンソウでも、花びら(顎片)の枚数は3枚～八重、色も白～紫～緑色などとさまざまな変異が多いことが観察できました。



図4. セツブンソウ七変化 (花のかたち)



図5. セツブンソウ七変化 (花の色)



図6. ニリンソウ七変化 (花びらの枚数)



図7. ニリンソウ七変化 (花の色)

2) 開花・結実の時期とタネのかたち

三田市内の自宅での栽培株の観察と自生地での野生株の観察すると、だいたい3月に開花して、5月には結実していました。オキナグサを除いてタネは小型でポロポロと落下しました(図8~11, 図中の数字は日付)。



図8. セツブンソウの開花から結実まで



図9. ニリンソウの開花から結実まで



図 10. ミスミノウの開花から結実まで



図 11. フクジュソウの開花から結実まで

3) 播種から開花までの期間

自宅でタネを蒔いて育てていくと、成長につれて、葉の形の変異も観察できて、なかなか楽しめました(図 12, 14)。だいたい3年目くらいで開花することが多いようです。掘り起こしてみると、セツブンソウでは、地下の球根が次第に大きくなって栄養をためていく様子がわかりました(図 13)。



図 12. セツブンソウの成長



図 13. セツブンソウの球根の成長



図 14. ミスミノウの成長

4) 日当たりと花の開き方

フクジュソウ、ミスミソウ、ニリンソウなど多くのキンポウゲ科の花は日が当たると花を大きく開くが、曇りでは閉じるか半びらきが多いことが観察できました (図 15)。

花は日が差す方向へ向く傾向があって、展示作品等は時々鉢を回して表面を見せる鉢回しが必要となることがあります。



図 15. 天候とフクジュソウの花の開き

5) オキナグサの観察

オキナグサは、気温の低い1-2月は、根元の花芽が多くの毛におおわれて寒さの厳しい時期を過ごしていて、気温が高くなる4月になると花茎が一気に伸長することが観察できました (図 16)。

5月前後にタネが成熟しますが、このころには花茎の一番長くなっていて、タネを風に飛ばせて遠くに散布する戦略と考えられます (図 17)。

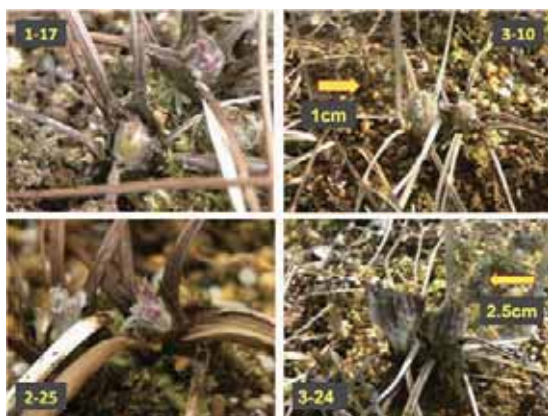


図 16. 毛でおおわれたオキナグサの新芽



図 17. 伸びるオキナグサの花茎とタネ

最後に

我々に四季の移り変わりや、安らぎを与えてくれる自然に咲く山野草。自生地の環境を観察し手入れなどの守る保護活動以外でも、実生増殖、挿し木増殖、無菌培養、ダンボールチップ播き、孢子播き増殖などにより個体数を確保する方法の熟練によるリスクマネジメントも重要かと思えます。これらの活動を今後とも続けて行い、山にある花は山に置く、自然の山野草を子子孫孫へ受け継ぐ一助となるような活動を今後も続けて行きたいと考えています。